論　　説

手づくりの医療

富山県農村医学研究会理事　越　山　健　二

高度経済成長，技術革新の中で，省力化，機械化がすすみ，ロボットが無人の工場内で生産する時代である。人類はいま有史以来の科学技術という第3の波の中に入りつつあるという指摘がある。

医学の面でも分子生物学，遺伝子組み替え，試験管ベビー，霊長類頭部移植，念じるだけで作動するコンピューター開発，着実に前進する臓器移植，脳刺激による精神制御など次々に報道されるニュースは，もはや生命や健康現象の解明も不可能ではないような気持にさせるのである。

画期的な情報工学の進歩は，コンピューターを基本とした各種の医療機器を開発し，医療システム化にも大きな威力を誇示し，それに期待する向きも多いようである。

日本はいま人口の老令化と，その保健対策に重大な関心が向けられている。医療の高度化，専門化がすすむ中で，その機会の均等や質の向上が大きな社会問題としてとり上げられている。一方，益々増大する医療費負担も今後の大きな課題となり既に本年2月から老人保健法も制定され，実施に移された。

医療の普遍化，効率化から情報工学技術は医療の中で大きな役割を受けもつ事はさけられない事と思うが，私共医療に関係する者はこの大きな波を正当に判断し，評価して，その対応に慎重でなければならないと考える。

生物行動学，大脳生理学，精神神経学のめざましい研究の数々は，人間の生命や行動の分野解明の手がかりを得ただけのものであり，緒についたばかりともいえる。

人間の生態は尚複雑で，その情報は多岐にわたり，身体的，精神的，且つ環境的にダイナミックに変動しており，情報のどれ一つとっても，平均化，規格化，標準化されないものであり，その解明は尚道遠しの感が強く，極言すれば個々別々のものであるともいえる。科学が進歩し，技術革新がすすめばすすむほど，医学の中心は個々の人間が主体であり，その生体が息づいている家庭や地域の要因を充分に汲(くみ)取った手づくりの対応が何よりも大切である事を忘れてはならない。